

F A D O

29

Janeiro 2001

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

新しい世紀の幕開けだ。人類が繰り返してきた過ちを消し去る事はできないが、せめてこの真っ白い21世紀のキャンパスを血で塗る事から始める事だけはなしにしたい。

笑いながら?泣きながら?愛する人と共に?たった一人?皆様は新しい年をどのように迎えられましたか?実は、この文は、18日の東京公演前に書いているので、ややこしいけど、わたしは多分、除夜の鐘を聞きながら、この会報の発送作業を一人ごそそとしているのではないだろうか。もしくは、はぐれた独り者がきまぐれに応援にきてくれるかもしれない。自分で選んだ道、わたしのリュックには夢が詰まっている。ひとりひとりをたずね歌い歩く胸を躍らせる様な夢が。一人一人の熱い思いでつくられたコンサート。わたしの今日はそれらに支えられている。狭い汚いアパート暮らしではあるが、好きな道を、自分の足で一步一步踏み締めながら歩く事の喜びでわたしの心は満ちている。私を支えてきて下さった皆さんにありがとう。この一年も、変らぬご声援をお願いします。1月24日、私は大台に乗ります。

月田秀子の昨日、今日、明日…

10月の北海道での5公演は約2000人を動員。北海道文化事業社の田中社長をはじめ北海道ファドファンクラブの面々、スタッフ供々の楽しいツアーだった。釧路港の市場で試食した花咲ガニ、トラバガニは最高だった。

10月24日、NHK第二放送「ちょっといい朝ティータイム」にゲスト出演。放送中にFAXが続々届く。放送終了後、問合せが殺到したとの嬉しい悲鳴を、NHKの西村ディレクターから聞いた。実は、氏は私が大阪の「シャンソニエ・ジルベールベコー」で歌っていた頃からのファンで、くる度に必ず「難船」のリクエストをいただいた。「いつか僕が自分の番組を持ったら、ゲストに呼ぶからね」との約束が20年の年月を経て実現したものだった。髪に白いものが目立ってはいけど、なかなか青年のように澁刺とした姿に、私たちは周囲の目もはばからず抱き合って再会を喜んだ。別れがあり、再び出会う人もいれば、二度と会えない人もいる。

11月5日の広島でのライブは、建物から、ホールまで手作りの「アビエルト」。その外壁に10畳程の巨大な私の顔の看板が架かっているのが、可部線の駅から見えた。菅野氏曰く「なにせファドを聞く為につくったようなものだから…」客は100人に満たなかったが、アングラっぽいその空間に、芝居をしてみたい思いに火がついた。あの看板持って帰らなかった…。

飛騨・信州路秋のツアーの幕は、松本で落とされた。準備期間が1か月ほどしかなかったにもかかわらず、宮坂氏の人望と熱意で40人を越える人たちが会場の松本城前の喫茶「紫陽花」に秋の気配をまよって集まってくれた。着くなり、厨房で「鱈のコロッケ」づくりのお手伝い。あらかじめレシピと干し鱈は送っておいた。日本人離れた、野性味とやさしさの混じったマスターの顔が忘れられない。翌日は、小諸ユース

ホテル。毎年、新井栄一、小室等さんと並んで、呼んでくれる。着くなり打ちたての新蕎麦をご馳走になる。顔ぶれも少しずつ定着してきたようだ。おでんとおにぎり、手作りの打ち上げのあと、おかあさん(と言っても私より若いのだ)が、習い始めたアルパで「虹の彼方に」を弾いてくれた。去年より白髪が目だった美佐子さんの、化粧つきのない素顔が素敵だった。彼らの浅間の山と共に生きる淡々とした生き方にエールを送ろう。翌朝、うっすらと雪化粧をした山の頂から吹いてくる風に吹かれながら、こうして今年も生きてある事に感謝しながら紅葉した赤松の林を散歩した。今年亡くなった人たちを思い出したら目頭が熱くなった。翌日高山に入る。壊される運命にあった材木倉庫を上手に改造した素敵なお店は、予想以上の200名近い人たちの熱気にあふれていた。開演前と休憩の時のざわめきが、嘘の様な演奏中の静かさだった。おごそかにポルトガルギター、ギター、私の声が太い古い梁に染み込んでゆく様だった。帰路の車の中は、高山の朝市で買い込んだ葱のにおいで一杯だった。圭ちゃん、運転ご苦労様。車を貸してくださった畑さんありがとう。

12月2日の大阪公演は、700人ほどのお客様。定員の半分にも満たないが、何とか、埋まった感じにはなった。黒田さんの娘さんが、「父のかわりに」と駆け付けてくれ、花束を下さった。それはずしりと重かった。2週間を過ぎても、柳や、ユーカリ(?)などの木物は部屋を飾ってくれている。春になったら、土に挿してみよう。その東峰しげごさんから、黒田さんの「ガンと上手につきあいなはれ」という本と一緒にこんなお手紙をいただいた。

「…大きな存在でした父を失った喪失感4か月を過ぎました今でもなかなか癒える事はありません。私にとりましては初七日、二七日…百箇日はまだまだ、父が亡くなった事を肯定させる「無情な行事」です。…受け止めるにはもう少し時間がかかりそうです。父の「しのぶ会」に何度か出席いたしましたが、その場所にいるだけで胸がしめつけられる思いでした。父と親交のあった方々にお目にかかり、生きていた時の父を強く感じるとよけいに亡くなった現実とのギャップに心を乱します。でも先日、長野県の笠松高原で心から父を偲んで下さる方々と、今年父が作詞しました「信州、結村のうた」(5月の入院中に曲ができニュースライダ最終号に掲載いたしました)を作家でシンガーソングライターのかしわ哲さんが歌って下さるので父の代わりに歌ってこようと思ひ参りました。それまで出席するのは辛かった偲ぶ会もその時始めて癒された気がいたしました。

今回のお誘いは大変嬉しく、父の好きだった月田さんのファドを是非聞かせていただきに参りたいと存じます。

今後心の中で現実との葛藤は続くと思いますが、黒田ジャーナルの清算事務がすべて終わる12月半ば頃には少しは気持ちの整理ができるのではと思っております。会社をすべて閉めた時点で改めて父に「お疲れ様でした。」と言いたいです。」

しげごさん、涙は止まりましたか?今回のコンサートで、やはり辛い思いをさせてしまった様な気がします。これから生きてゆく私の為に、どうしても、今は会えない黒田さんに登場してもらいたかったのです。この傲慢にも近い勝手を許して下さい。

新連載

AMÁLIA

—ヴァイトール・パヴァオンドス・サントスに語った自伝— @
訳:松田美緒

序 ああ、このわたしの痛みよ

人生などに意味はない。いつかは死んでしまうのだから。いつもこう思っていた。いつも悲しい考えが胸にあった。夜になってまだ明かりが灯る家を見ては考えた。こんな時間まで明かりがついているのだから、あの家には問題など何もないのだろう。闘牛の様な陽気なショーに行くと、陽光の中で嬉しそうに手をたたいている群衆を見てはこう思った。何年かしたらここにいる人達は誰もいなくなる。もうみんな死んでしまっているだろうから。幼い頃から、わたしにはこんな悲しい考えがあった。いつも自分が他人の常識からはずれていると感じていた。死の考えは13歳から18歳のころまでわたしにつきまとっていた。人々に叱りつけられるたびに、何も分かってくれないと思った。いつも死んでしまいたくなった。かれらに可哀想と思ってほしかったからだ。しかし、死というものに対する本当の分別がついたのは、妹のアニーニャスが結核で死んだときだった。妹は16歳で、わたしが20歳になる頃だった。

それから後は、二度と死のうとはしなかった。1984年の9月、もう一度決意を決めるまでは。その頃の6年間、死の考えがわたしにとり憑いて離れなかった。右目が腫れているのを感じていたが、耳下腺を切った後の同じ箇所におできが出来はじめたのだ。治療のしようのない、あの脳腫瘍だと思った。誰かに言うことも、治療するのももう意味がない。何のために? 医者や友人はいるけど、悲しませるようなことは黙っておきたい。先延ばしにしていながらも、つねにこの考えが頭にあった。わたしに残された解決法は自殺だけだ、と。

ニューヨークに行く日までの間、向こうで死のうと心に決めていた。薬などはすべて持って行った。準備はできている。自分の部屋でひとり死んでいるのを発見され、話題になるのはいやだった。だから、わたしの死が知られるのは、遠くへ行ってしまった後にするのだ。わたしはアメリカにただ独りで、絶対の覚悟をきめてやってきた。しかし、計画は延期していた。偶然にも、あのフレッド・アステアのビデオを買うことを思い出したからだ。まず1本、そして2本目、3本目。映画を見ては延期した。今日はだめ。明日死のう。わたしの歌を聴いただけで誰かが救われたということが、今ようやく、わたしには分かる。何度もそう言われたが、その時はかれらがただ愛想よくしたいのだろう、と決め付けていた。あのオランダ人の女の子が亡くなるときに、わたしの音楽と共に逝きたいと言ったことが、今なら分かる。彼女は長年の間病気だったはずだ。わたしの歌を聴くことが、それこそ救いであり楽しみだったのだ。あの大変な時を生きていられたのはフレッド・アステアのおかげだとなぜ言えるのかが今になって分かる。もし彼でなかったら、耐えられたかどうか分からない。

映画を観て、時は過ぎた。とうとう自分を正当化し、最後には結局できなかったことへの言い訳を繕い始めた。わたしの理解者もない、知る人もいない場所のあるホテルの一室で、たった独りで死んでゆくはずだったのだ、などと考え始めた。そしてエストレーラに知らせた。彼女はいつでもわたしのことを理解してくれ、わたしが死ぬ時にはその後の事々に対処してくれるであろう人だ。エストレーラが着いた頃には、癌の専門医に行く決心がついていた。そこで、本当に腫瘍があることがわかった。癌の専門医でもある耳鼻咽喉科の医者は、腫瘍を切る必要があると告げ、その腫瘍は99から100パーセントの良性腫瘍であると言った。

手術は恐ろしかったが、賭けてみた。今から腫瘍を切り取らなければいけない。もうそいつと一緒に生きなくていいのだ。もし手術中に死ぬのなら、よし、死んでやろう。もしも麻酔で死ぬのなら、よし死んでやろうじゃないか。悪化するのなら、死んでしまおう。もし副作用のせいで片目を見開き、口がゆがんだ顔になるくらいなら、自殺しかない。もう決意はしてある。シーザーはニューヨークにありき。

その手術は成功に終わり、わたしは回復に向かった。腫瘍は悪性ではなく体調はとても良くなった。悪いことといえばただ一つ、切り取った腺の部分に小さくほみが残ったことだけだ。

帰国後、コリゼウに再び出演した(1985年4月19日)。そこでは観客から演奏者達までが一緒になって、又とない光景を見せてくれた。観客は始まりからわたしと共にいた。始めは、わたしがまた歌えるのだろうかを確かめようと待ちかまえていた。恐れながら。熱望しながら。そしてその後には、わたしが元気で、その上まだ上手に歌えるのを見て、驚きが広がった。歓喜の感情がそこにはあった。「アマリアがここにいる!」それは一人のアーティストへの切望だった。しかしもっとも大切なのは、それがある一人の人間への友情、やさしさ、愛情、誇りでもあったことなのだ。なぜなら、わたしの様に長年歌い続けている者はそれぞれの人々の日常生活に加わっている。たゆまず共に生きている。わたしは何年間もそれに気付かず、耐えようとしなかった。彼らはわたしの中に完成した豊かな才能を感じてくれ、又、わたしがこれ以上は無理だと諦めて歌わないのだと分かっていた。わたしは決して楽になれず、人々はこの降伏を責めた。

コリゼウでのこの光景は、あの悲しみの6年の終わりだった。わたしの印象をつくり、そして他人にわかるはずもないと思っていたあの悲しみ。だが、わたしはこんな人間に生まれたのだ。悲しみはわたしの天性だ。もしそうでなければ、わたしはわたしではなく別の人間だっただろう。ファド、それはわたしにとってバラードに始まり、最後には自分自身の姿を映し出す、ある人生のかたちになった。なんと奇妙な人生のかたちであろうか。



21世紀、ファドは人間性回復の シンボル音楽になり得るか?

高島正博

一人間社会は、人々があたかも家族のように全体的な人格として相互に結び付けられているようなあり方(ゲメインシャフト)から、断片的な個人として人々が人格の一部分だけで組織に特有な目的に対応し、関わるあり方(ゲゼルシャフト)へと移行する。そして、このような移行は、とりわけ産業革命により現れた変化(資本主義社会を原型とする社会構造)により加速化され、人間と人間との間の疎外はますます進んでゆく。— これは、ドイツの社会学者フェルナンド・テンニエス(1855～1936年)の著作「ゲメインシャフトとゲゼルシャフト」の説として知られた見方である。

21世紀を迎えた今、20世紀をふりかえれば、このような見方が実に見事に当たっているように思う。ゲゼルシャフトへの移行の中で、人間が自分の周囲の世界に専ら利害、打算の立場に関わり、それらとの間には全人格的でない、よそよそしい関係しかも得ない人間疎外の傾向を強めてきた。大多数の人々は、職業上は勿論、社会生活のさまざまな局面において、社会的知性、魂と感性に裏打ちされる人格的な自己の欲求の充足を見出だすことが困難になり、人々は人格的分裂と深い孤独の中で生きることを基調として強いられている。私の知り得る印象では、このような傾向が特に強まっていったと思えるのは、先進国と呼ばれる多くの国が物質中心主義へと転じてゆく1960年前後(日本は高度経済成長路線で経済主義に転じている)からである。

この時期、イタリアの映画監督ミケランジェロ・アントニオーニは、現代の人間疎外を強く意識し、これを象徴・デフォルメする形で「情事」、「太陽はひとりぼっち」などの映画を撮っている。これらは、異性愛という求心力からもっとも人間的、人格的結びつきであるはずの男女間においても、人間的なものが不確かであることを描き、〈愛の不毛〉の映画として、世界の映画界で強く注目をあびた作品である。日本でも1962年度のキネマ旬報社ベストテンで、それぞれ4位、5位に、さらに8位に「夜」が入り、この年は、アントニオーニの作品が3本も選ばれている。

それから世紀末の約40年間、物質主義に踏み出した国々では、とりわけ日本などにおいては、効率主義、競争原理、市場原理、そしてスピードが、何者かに追われる如く猛烈に追及されてゆく中で、人々は心のゆとりと人格的なアイデンティティをますます奪われてきた。現代日本の精神的荒廃も、この事と無縁でないはずである。社会の進展が強いるこのような強まる緊張、早まるテンポに引きづられ、音楽はますますやかましくなってきた。中国に「人間がよりせでない時、その音楽はますますやかましくなる」という格言があるようだが、現代の音楽はまさしく人間の耐え得る最高の音にまで達しているようである。他方、最近になって癒しの音楽も求められている。これは人間として至極もつともな反応である。

21世紀、ファドはどのような音楽と扱えられていくだろうか。癒しの音楽の一つとして新たなファン層を獲得していくかも知れない。

日本にあって、ファドファンが未だマイナーである事を考えれば、その事はそれなりに大変結構な事と思う。しかし癒しといっても、ファドは単に神経を和らげたり、明日へのリフレッシュというようなイージー的な音楽ではない。ファドはもっと本源的なものに迫る音楽である。物質中心主義が生産性や効率性に沿わない人間的なものを切り捨てながら歴史を動かしてきたが、ファドはその切り捨てられたものを最も大切に守ってきた音楽である。人間の存在は、便利、快適、スピードだけに関わっている訳ではない。これらと次元を異にする魂、人格への希求を存在の根底に持っている。19世紀のポルトガルのリスボン、人々が肩を寄せ合い、あるいは向き合うゲメインシャフト的要素が色濃くあった庶民生活の中で生まれ育ったファドは、アルゼンチンタンゴ(1930年代初期までの古典タンゴ)と同じく、本来的に人間の全人格的愛情と共感の熱い血が流れている。遠くに離れてしまった対象、身近なりアリティになくも心の奥深いところに宿る或るものを歌うファドの〈サウダーデ〉には、従って他者とか或る対象に対する深い愛情と情念がある。また、個人の深い嘆きや孤独をファドが語る時も、個人にとって最もつらいそのことを理解し共有しようとする人々の基盤的土壌が存在することを窺わせる。ファドにはゲメインシャフト的土壌の匂いと香りが漂っているのである。

21世紀には、本源的な人間性の回復を求め、様々な挑戦が始まることと思われる。キューバの古い美しい音楽「ソン」の長老たちの、今なお失わない魅力を描き、注目を浴びた映画「ブエナビスタ・ソーシャル・クラブ」(昨年日本公開)の監督、西独ニュージャーマンシネマの旗手の一人であったヴァイム・ヴェンダースは、1987年、「ベルリン天使の詩」というユニークな映画で人々が分割された人間疎外の現状を脱出すべく、天使の決断という象徴手法を以って、〈人と人のつながり〉の可能性の追及というメッセージを既に先駆的に提示した。

「ゲメインシャフトとゲゼルシャフト」第二版を1912年に発表した冒頭のフェルナンド・テンニエスは、再びゲメインシャフトの社会に戻らないとしつつも、遠い将来にゲメインシャフトとゲゼルシャフトの特質を統合する社会が実現するであろう、という微かな希望の光を見ようとしたといわれている。両要素の統合は、経済社会構造面では非営利・非市場原理が共存するなど、営利・市場原理の「至上主義」の修正を伴っていくと予想されるが、ともあれ、人間疎外からの人間性回復における文化の独自の先行性の追及は重要である。21世紀のいつからか、統合の形にしろ、ゲメインシャフト的要素が回復してゆくためには、そのことに対する人々の主体的情念が先行し広がっていかなければならないからである。

ゲメインシャフト的土壌の匂いと香りを失わず堅持するファドは、20世紀の後期には追憶として貴重であった。21世紀に転じ、ファドは過去の追憶と共に、さらにそれを超えてゲメインシャフト的要素回復の主体的情念を支える象徴文化の一つとして、シンボライズされた音楽の位置を築いていくのではないかと私は密かに思う。

●前略 お元気で活躍のご様子でうれしく思っています。

月ちゃんの話がラジオで聞くことが時々あります。普段ラジオやテレビを余りみないのですが、たまたまカーラジオのスイッチを入れるとどこかで聞いた声だなと思うと月ちゃんなので、あれっと思いつながり流れているファドを聞きました。

月ちゃんに手紙を書こうと思ったのは、黒田清さんについての貴女の言葉を拝見したからです。

実は、私は黒田清氏の熱烈なファンでした。ニュースライダーを読むため(そして魚釣りの情報を得るため)、ずっと購入していました。

又、黒田さんの「会えてよかった」という本を大量に購入して、少年事件や青年の刑事弁護活動に利用させてもらっていたのです。

私は甲山事件などの冤罪事件も数多く担当し、又政治活動や社会運動も数多く担当しています。しかし、私の弁護士としての原点は、不幸にして犯罪、事件をおこしてしまった人々の更生、立ち直りに何とか力になりたいというところにあります。両親や、配偶者、子どもたち等、自分がかけがいのないものと思っている人達への思い、絆こそが人間を支え、立ち直りの力となると信じている、というか信じたのです。そこで山本周五郎の小説とか、人間と人間の絆、あるいは思いをとりあげた読み物を差し入れたりしていました。そんな時に黒田清さんの「会えてよかった」にめぐりあえました。50冊ぐらいを購入して、多くの少年や若い被告人の人達に読んでもらい感想文を送ってもらいました。皆それぞれの境遇、思いに従って、「会えてよかった」の中から一番感動したものを選んで感想文を送ってくれます。これをご両親等にお見せするわけです。事件をおこし親子関係も当然荒れており、子どもに対する不信や、配偶者に対する不安に傷ついていた人々はその感想文をみて、皆、安心し、再び信頼関係を取り戻すきっかけとなります。

私はそんな関係からは是非とも一度黒田さんにお会いしたいと思っていました。その時は是非とも月ちゃんから紹介してもらい、一緒に酒を飲んで語り合いたいと思っていました。月ちゃんの追悼文を読んで、再度「会えてよかった」50冊を三五館に追加注文しました。

黒田さんの思いを私も継承して、黒田さんの思いに応えられる弁護活動を今後もしていきたいと思っています。

私が月ちゃんにリクエストするとしたら、20数年前にしたように「あざみの歌」になると思います。ファドは好きですが、それ以上に「あざみの歌」が好きです。

購入しているチケットですが、事務員の皆以外に私の事件関係者にも配ることがあります。皆感動しています。今後も歌を通じて私達の悩み多き心を洗い流して下さい。お元気で。

(奈良/高野嘉雄)

(「あざみの歌」を歌っていた20数年前、私は「ギター芸者」って呼ばれていたらしいんだけど…黒田さんを通じて同じ思いを重ね合わせる事ができるなんて本当に、嬉しいね。)

●11月5日のコンサート、ありがとうございました。本当を言うともう少し客も入る予定だったんだけど…。(前回も、前々回も150人は

入っていました。でも、出来としては今までで一番だった。アビエルという場所。雰囲気作り。そして歌。打ち上げで残ってくれた人たちに話を聞くと、涙が出るほど良かったといわれる方が多くいました。ちゃんと聞いていただければ、ファドの良さは必ず伝わります。ファドの虫に刺された人は、おそらく死ぬまで聞きつづけるでしょう。来年も必ずやります。そしてその次も、そのまた次も…。アビエルがある限り、聞きたい人がいる限り、僕が生きてる限り。「友は遠く」。この歌はホントに良い。気に入ってます。では次回も宜しくお願いします。

(広島/菅野正博)

(どっちがしぶとく生き残るのか?あなたも白髪が目立ってきたけど、共白髪でゆきましょう。そこまでファドに入れ込んでいる訳はmumumumu…?あのコンサートの後だもんね、あなたが結婚したのは。私は縁結びの神様。そして本人は縁遠い。)

●先日はお便りとファド倶楽部の会報をお送りいただきまして有難うございました。全部読んでから返事を書こうと思っていたのですが、丁度、中間試験と重なり、問題作成、採点、そして今やっと評価を出したところ。ジャーナルを毎日持ち歩いていたのですが、創刊号と28号を読んだところ。

ファドとの出会い、興味深く読み、また、共感しました。30年近くになりますか、リスボンで初めてファドを聴きました。哀愁を帯び、日本人の心に共通する感情を持つ音楽だと思いました。その店に浜口庫之助も来ていて、こういう所で新しい音楽を吸収しているのだなと思ったものでした。留学も大変でしたね。私は20年前ですが、ハワイ大学に1年間留学した経験があります。行ってすぐに熱を出し、もう生きて帰れないのではと覚悟をしたことを思い出します。講義も宿題が出ているのも知らずに、次の時間に恥ずかしい思いもしました。今となっては笑い話ですが、ハワイは日本語が通じますが、ポルトガルでは全く通じなかったでしょうし、また、それだからこそファドの心に通じたのかもしれない。取り急ぎ、御礼まで。

(東京/M.M)

(言葉が通じていても思いが通じない場合もある。言葉が通じないからお互い必死になる。そうすると通じるもんだと言う事をポルトガルで教えられました。)

●逝く秋や やわらかに 時身じろぎもせで

久しぶりにHIDECOの姿、拝見。コスチュームのせいもあり?若々しく色っぽく見えた。「はるばると 辿りし道や 今日的首尾!」ヨロシオマシタデ!2000年の暮、新しい旅立ちへ、Revised HIDECO, refreshed TSUQUIDA. 俺二階から見てただけだけど、本当によかった。心から拍手を贈ろう。半世紀、やっとならHIDECOがstando-positionを見つけて、また新しいリュックを肩に、歩み、立ち、旅を始めたのかな?ともかくにも健康是財宝、常歩無限なのだ。久しぶりにエエオンナHIDECOを見せてくれてありがとう。我が輩、奈良観光ボランティアガイド頑張っておる。草々。

(奈良/油谷 稔)

(あぶさん、3月の二月堂(のお水取りの時、呼んで下さい。今度は熱燗だね。)

ficção

読切連載

秀子のエピソード帖

「D-21 (デニイチ) - 秀子、その肉体の秘密」

内間 天馬

私かなり怒ってます。最近の週刊誌の「巨乳」のオンパレード、ホルスタインじゃあるまいし。表現の自由は守らなければならない。だから、ああいう表現はあえて許そう。じゃ、何に怒っているのか。女性側から抗議の声があがらないことに怒ってるんです。おっぱいだって人の子です。大きい、小さい、それぞれにけなげに生きてるのです。それを巨乳だけ持てはやして…。小乳の方など立つ瀬がないじゃないですか。小乳の方、堂々と胸を張って生きて下さい(これショーニュード)。 「寄せて上げる」も「フロントホック」も反対だ。おっぱいにもっと自由を!とにかく女性たちよ、ドンドン文句を言わなきゃイカン。私もドンドン怒る。ドンドン怒ってる証拠に今回のこのコラム、何を書くのか忘れてしまったじゃないですか。

エートー、あつ、そうそう…秀子女史! 貴女のサイズは如何なるや? 「わたしは21よ」。エツ、21? 途端に酔っ払いの頭は混沌として(?!) …それはインチなるやメートルなるや? 「センチ、足のサイズよ」。誰が足のサイズなんか聞いてるんですか。だけど随分小さいんですねえ。「そう、いつだったか、バーで、この靴履ける人に差し上げ

ますって、小さな赤い靴を飾っていた。誰にも履けずに淋しそうだったので履いてみたの。そしたら、大きすぎて、歩く度にパカパカ脱げちゃうの」。ここで秀子さん突然泣き出した。秀子さん、ど、どうしたんですか? 「靴屋さんでサイズを告げたら、子供靴売り場に連れて行かれたの、ワーツ(泣)」。突然泣かれたら、私うろたえます。なんとか話題変えなくちゃ…あの一、もっと上の方のサイズをお尋ね申したのでございますが…。 「Dよ」。ご本人の自己申告により、Dカップと判明したのでございます。つまり、Dと21で、「D-21」(デニイチ)。

鉄道ファンのみならず、日本の蒸気機関車の最高傑作としてつと名高いのが「デゴイチ」の愛称で有名なD-51型蒸気機関車であります。きわめて優美な中にも力強さを備え、バランスの良さではピカイチであったそうです。かたや、D-21(デニイチ)や如何に? Dに対して21ではバランスとして小さいのでは? いや、そんなことはないです。ちゃんとステージの上を右に左に安定してお歩きになれるから充分でしょう(ころんだの見たことあるけど)。中国では唐から清の時代にわたって、美人の象徴として、「纏足(てんそく)」があったじゃないですか。嘆くな、秀子さん! とん足じゃないんだ。

で、どなたか、子供用、じゃなかった、ちいさいサイズのお洒落な靴を売っているお店をご存じの方、秀子さんに教えてあげてくださいーい。

vamos cantar!

より高い塔から

訳詞 : Caldo Verde

より高い塔に立ち
私は この身の嘆きを歌い
私は この身の熱さを歌う
ああ わが同胞よ
より大きな塔からは見える
どれほど苦悩の大きいことか
今ひとたび 歌おう
今ひとたび 歌おう

歌うのだ 悲しみの枷を
解かれた人のように
故郷の懐かしい水で
渴きをいやす人のように
湧き上がる熱い想いと
生と死を
全き自由のうちに
湧き上がる熱い思いを

しかし苦しみを歌うものは
己の嘆きに留まてはいない
わが心は 制圧されたテージョに痛み
わが心は 早ばつに痛む
失われた歳月に 心痛む
長引く災いに 心痛む
わが心は痛む 忘れられた民と慈しみの丘に
わが心は痛む 失われた歳月と慈しみの丘に

É da torre mais alta

Letra : José Carlos Ary dos Santos
Musica : Alain Oulman

É da torre mais alta
que eu canto este meu pranto
que eu canto este meu sangue
ai este meu povo
Dessa torre maior
ai que penas são grande
por uma cantar de novo
por uma cantar de novo

Cantar como quem despe
a ganga da tristeza
como quem bebe água
da saudade
Chama que nasci cresce
e vida e morreza
Chama que nasci cresce
em plana liberdade

Mas nunca ser doi só
quem cantar magoa
Doi-me Tejo vensido
Doi-me a segura
Doi-me tempo perdido
Doi-me mal da lonjura
Doi-me povo esquecido e morro da ternura
Doi-me tempo perdido e morro da ternura

informação

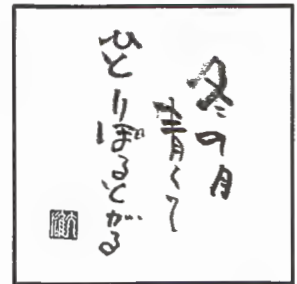
- ファド倶楽部会員でもあり、私の呑み友達、ポルトガルへも何回かスケッチ旅行に出かけている西井義晃氏の個展が下記の予定で開催されます。今年は、彼のポルトガルの絵も見てくださいながらのライブも予定しています。是非、お出かけください。

1月 4日(木)～ 9日(火) 大阪ミナミ・松竹座前「ギャラリー香」

3月12日(月)～18日(日) 東京・銀座「ガレリア グラフィカ」

- 『五木寛之論楽会2000』では、沖縄民謡の古謝美佐子、フォークの三上寛、山崎ハコの先輩諸氏に混じって、ファドのレパートリーから「サウダーデ」「暗いはしけ」、ギリシャのミクス・テオドラキスの曲に五木寛之さんが詩をつけてくださった「汽車は八時に発つ」の三曲を歌わせていただきました。本番前に歌に対する貴重なアドバイスをいただき、緊張の極みで歌いました。打ち上げでは、「大ブレイク寸前の歌手」としてご紹介いただき、敬愛する五木寛之さんの期待にどれだけ応えられるか、2001年は私の人生の正念場になりそうです。このままマイナーであっても、よしんば大ブレイクしたとしても、どうかファンの皆様お見限りなくご声援くださいますよう心からお願いいたします。

- 黒田清著『会えてよかった』(1,200円)在庫あります。ご希望の方はファド倶楽部までFAXもしくはお電話ください。



冬の月 青くて ひとりぼるとがる
木割大雄

<月田秀子のスケジュール>

1月 10日(水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
25日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535
29日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
2月 7日(水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
11日(日)	京都・「TSUQUIDA HIDEKO FADO CONCERTO IN KYOTO」 *チラシ参照	*問合せ : 075-231-4437 (高木)
26日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
3月 7日(水)	大阪・南方「三裕の館」	*問合せ : 06-6304-1745
26日(月)	大阪・心斎橋「アートクラブ」	*問合せ : 06-6212-2870
29日(木)	京都・四条河原町「巴里野郎」	*問合せ : 075-361-3535

*2月の巴里野郎はお休みさせていただきます。11日の京都「アートコンプレックス1928」でのコンサートにきて下さい！
京都の有志たちが初めて企画して下さいました。

<編集後記>

読み応えのある投稿を高島氏からいただいた。歌の背景にある大切なものを見せてくれた。多謝。新連載アマリアの自伝の訳者は、あのMIOちゃんである。彼女の実行力に感嘆。新世紀をしっかりと背負っていける若者だ。ゴールは遠い。走り出した限りは走り続けるしかない。乞う、ご声援。(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ

<http://www.asahi-net.or.jp/~wc3k-smz/FADO/menu.html>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第29号
- 2001年1月1日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543-0023 大阪市天王寺区味原町2-10-502
- TEL&FAX 06-6765-4808